

日本人の心の變を探る——相良 亨『日本人の心』を読んで

渡部 武

—

敗戦。暑い夏だった。歴戦の兵どもは動揺した。負けるということなにかを、彼等は身をもって知っていたからである。それを知らぬ私はホッしたのを今でも思い出す。敗戦の原因、再建の方途が問われるなかで、日本人の在り方に対する全面的な反省がはじまり、日本民族の過去、特に伝統、民族的精華といわれたものが、戦争責任を問われ、近代化・民主化の前に厳しく批判され、断罪された。時が移り、高度経済成長期を経過して、経済大国日本といわれるまでになった。この日本の成功の原因は何かをめぐって、内外の学者の関心があつまり、幾多の論議が展開された。そこでは、かって封建的残滓とされたものが見直され、評価されたりしている。同時に国民の日本の歴史への関心は根強く、また日本人論や日本文化論も賑わうようになった。

わが国は今繁栄のさなかに、価値観が多様化し、自由と放縦との境が見失われ、平等化が進むにつれ責務の觀念は後退し、われわれは個人としても、国民としても、そのアイデンティティを失うのではないかと憂うる声があがっている。我が国の現状がこのように憂うべきものであるならば、この

危機を克服するには、未来を望みながら歴史に聞くことが、有力な手だてであるはずである。ところが、このこととは関係なしに、このところの日本史や日本人論・日本文化論の静かなブームは続いているように思われる。歴史に聞くこともせず現実の危惧に対応しようとするから、規範意識のみ先行し、真剣に道徳の法律化を期待するようになり、道徳教育振興の声はいよいよ高くなるばかりである。今必要とおもわれる基本的事柄の一つは、歴史、そして伝統と謙虚に真剣に対話することであろう。

「われわれに求められているのは、自分が、現に感じていることを、あるいは無意識に心の底で思っていることを、ありのままに見つめ、これを伝統とのかかわりにおいて理解し、自らのうちにある可能性を追究することである。」そのため、「日本人の心の豊かな驍を、私の及ぶ限りにおいて追」うことは必然となる。問題意識を共有する者にとって、相良亨氏の『日本人の心』は、内容について賛成するか否かは別にして、必見の書といえよう。

さて、本書の目次は次の通りである。

一章 交わりの心 二章 対峙する精神

四章 道徳の風化 五章 持続の価値 六章 あきらめと覚悟

七章 死と生 八章 おのずから

本書は、一章から七章にわたって日本人の心のあり方の七つの側面を追究し、八章ではこれらの根底に働く「おのずから」の形而上学を説明するという、そのような構成になっている。なお、一章から五章には現実に対しての日本人の心のありよう、はたらきよう、とくに対人関係や対共同体関係に示されている心的な特性が描かれ、六章と七章にはそれらを支えている日本人の宗教的な心情が追求され、それをふまえて「おのずから」の形而上学が提示される。著者は、各章のテーマの相互関連と、この中に一個の日本人の生きた姿が浮かび上がってくることを配慮して筆を進め、さらにその全体像にそれぞれの側面・特性があらためて位置づけられることを課題としている。

本書が日本人の心のあり方として示す諸側面は、これまでに先学が説いてきたところでもあるが、それらの指摘にとどまらず、それぞれの側面がもつ内容の深みと豊かさを資料を駆使して追っている

こと、またはじめに紹介した問題意識に従って著者がそれらに内在する問題点を指摘し解明を試みている点に、本書の存在意義がある。情の交わりの深さその超越的性格の解明、純粹な心、無私性、誠の問題点の指摘、武士の精神とその伝統の果たした歴史的意義の再評価、道理の風化とその克服の問題、さらに日本人の心のあり方の根底にある宗教的心情の解明と、それによる超越や普遍への思考の可能性の探求などについての言及がそれである。それらの問題の本格的な解明は今後の課題として残されており、著者による今後の「おのずからの形而上学」の展開と普遍的な「理の哲学」、さらにそれらを基盤とした「誠の倫理学」の試みに待たなくてはならない。

二

本書の一連の主張を取り出してみると次のようにまとめることが出来よう。(1) 日本人は心情の純粹さをひたすら追求したが、(2) それが精神の緊張を欠くとき力を失い、オプティミズムに導かれるとき方向を失う。(3) それには、普遍的な理についての意識が自覚的に形成されなかったことが深く関わっている。(4) しかし、宗教的な情操に裏打ちされて、豊かな優れた精神的な営みと人生を実現した先人を持っている。(5) 以上から導かれるわれわれの課題は、(ア) 普遍的な理の意識をどのように確立するかということ、(イ) われわれの宗教的な心情を理解し、絶対や超越への認識を育てることにある。敢えてこのようにまとめながら、著者の問題意識の強烈さとは裏腹に、なんとなく出口のなき、問題解決の緒口が見付かるであろうかという疑念を懐いた。それは、前半の山場が「道理の風化」であり、後半のしたがってまた全体の締め括りが「おのずから」の形而上学となっていることによるであろう。道理が情に吸収されれば精神的な緊張は失われ、オプティミズムに身を委ねることになろうし、「おのずから」に参入して生きよというのでは、思想的な営為は不可能となり、心情の純化という虚無的な精神の営みが残されるに過ぎなくなってしまうのではなからうか。さらに、道理が風化するにもなって、客観的な規範として現に今ある制度・習俗へ随順するというのでは考えることの意味も失われ、人生も太平洋戦争時代の滅私もって大義に生きる体のものになるの

ではないか。本書の論述にうなずきながら、読み終つての感想はこのようであつた。

このような感想をなせいでいたか、いくつかの要因があるが、まず「情」の扱いに問題があると思われる。「情」が「なさけ」であればプラスの概念であり、交わり形成の契機となり、精神的な緊張の高みに応じて親鸞・道元の慈悲に至り得るのは必然である。そのような「情」が道理を吸収するのは当然の筋といえよう。しかし、情には、情欲としての情、感情としての情、さらにそれらを包んだ、ほとんど性といつてよい情という使い方があつた。本書では「なさけとしての情」に注目して、その他の情への配慮が足りないように思われる。道理を風化する情はまさにこの「なさけとしての情」である。しかし、親鸞を捨身の慈悲の高みに導いたのは煩惱具足の凡夫・悪人の情欲との戦いではなかつたのではないか。「天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきこと」(歎異抄)であるはずの念仏を申しても一向にその気にさせないよう妨げている煩惱との戦いを抜きにしては慈悲の高みには達し得なかつたのではないか。道元においても、榮西の慈悲の実践に感動する前提としては、八歳の時母と死別してからの情念としての無常感を無常観にまで高める長く苦しい内面の闘いがあつたことは確かである。概して日本人は禁欲主義的ではない。日本仏教は戒律を簡素化し世俗化した。朱子学を標榜した林羅山が「人欲の公」を説いたのでもわかるように、江戸儒学は人欲に寛容であつた。情のなさけとは異なる側面をとりあげて、そこにみられる心の驀を明らかにすることは、出口を発見するための作業として必要であると思われる。

次に、精神の緊張についての叙述が、出口をつけていくためには必要ではないか、という疑問である。それはまた日本人の心の驀を深く生き生きととらえるためにも不可欠と思われるからである。精神の緊張の契機としては、理と情、理と事、私と公、自然と作為、自然と精神などを挙げることでできる。しかし、これらの諸契機は西洋の思想におけるものであつて、日本では、特に日本の近代以前ではという感がしないではない。とはいへ、日本人にそれらが全く欠けているとは思われない。日本人がひたすら心情の純粹性・無私性を追求し、普遍的な理を客観的に追求する態度を形成することなく、習俗への随順において理に生きると理解したということは、その通りであらう。この場合、心

情を純化し無私ならしめる過程、そこにおける理と情、自然と作為、自と他、公と私との間の対立・葛藤がどう処理されていったかが明らかにされるならば、そこから異なった思想回路をつける可能性も生じてくるのではないであろうか。純粹・無私が日本人をニヒリスティックにすることなく、精神の衰弱を招くこともなく、むしろ逆にそれらを動機に意気・土気を結晶させてきたことは、精神内部の厳しい葛藤、闘いなしにはありえないと思われる。この葛藤・闘いの過程が分析されることによって、課題に迫る手掛かりが得られるのではなからうか。

三

日本人は己れ、とくに己れの内面史を語りたがらない。西洋が幾多の優れた自伝を持っているのに對して、我が国には福沢諭吉、内村鑑三などその例は極めて乏しい。基本的には日本人の自我の未成熟による弱さが原因だとされるが、自分のつらく苦しい心の中を語ることを、煩惱の所為として戒める仏教思想や女々しくはかないとして禁ずる武士的精神の影響の強さも見逃せない。資料の制約があるが、日本人の精神の緊張を取り上げて解明し、客観的に叙述する試みを期待したいものである。

精神の緊張の点で興味を引かれるのが二章「対峙する精神」である。ここでは武士の対峙的人倫觀を取り上げ、それは武士が生死・存亡をかけたにらみあい・戦いのなかで「ありのままの自己」即「あるべき自己」に鍛え上げる過程において精神的な独立性を確立し、それとともに自らを敬するとともに敵をも敬すという内容であったことが論じられている。またこの対峙的人間觀から生まれた独立の精神は、西欧の近代的人間觀受容の素地となったことが指摘される。そのうえでさらに武士の対峙する精神が自己を絶対化する方向に向かわず、「人は人たり、我は我たり」という一隅に立つ姿勢を結実したこと、しかもこの姿勢につながるものが、実は日本人の心の中に流れていることが強調されている。

ここに解明された武士の精神は、日本人の精神的資質が戦闘員としての体験を通して結実したものであって、貴重な遺産として評価されるばかりではなく、今日のわれわれをも引き付けてやまないものである。

のである。しかし、福沢諭吉や内村鑑三たちがその中で育った武士の家が消滅してから一世紀以上の歳月が立った今日われわれは武士の精神を如何に受け止めたらよいのであろうか。武は戦闘を前提に生死・存亡を分かつものであり、根本において人間関係を否定する点で、武士の対峙する精神・独立の精神は人を孤独・孤立へと導きかねない。その典型の一つを『葉隠』の死を覚悟し、忍ぶ恋に生きる姿に見ることが出来るのではないだろうか。こうした危険から武士の精神を守り育てたのは仏教と儒教の倫理想象ではなかつたらうか。

なお、同じ章の末尾に『他は他たり、われはわれたり』、あるいは、人間は真理の、したがって天地の一隅にしか立ちえないという考え方は、さらにさかのぼれば、日本人の多神教的な八百万の神的な考え方にもつながるのであろう』とあり、この八百万の神的な考え方が、道元や内村鑑三の思想につながるかとされている。この点については、道元においては、仏教の諸法実相や悉有仏性の考え方と八百万の神的な考え方との相互交渉や影響について思想的・思想的な解明による実証が必要と思われる。また、内村については、彼が自伝の中で、八百万神の前に彼の魂が如何に混乱、苦悩したか、キリスト教に入信してそこから抜け出し、いかに晴ればれとしたかを語っており、この八百万神信仰からの脱出の体験との調整が必要とおもわれる。読みすやく啓蒙的であることを目指す本書の性質から省略されているのかもしれないが、一応指摘しておきたい。

四

最後に、日本人の心の襲を追い、その特質と伝統を明らかにし、今日の思想的課題に対しようとするとき、われわれの思惟の仕方や意識構造、思想構造と言葉との関連についての考察が不可欠ではないかということである。それは、いうまでもなく、われわれは言葉によって考えるからである。時枝誠記によれば、日本語の文の構造は、基本的には詞が辞によって総括される風呂敷型構造の形式により、さらにそれが順次に詞辭の結合したものに包摂されるという入子型構造の形式によって、統一さされている(『国語学原論』)。この構造から日本語の特質が指摘されるとともに、日本語による思想表

現上の特徴が解明されるが、中村雄二郎の整理を参考にまとめてみると次のようになる（『制度と情念と』）。

第一に、日本語においては、文の全体が主体的なものの直接的表現である「辞」によって包まれるから、文は主観性を帯びたものとなる。第二に文の部分である入子も「詞」（客体的なものの表現）と辞の統一体であるから、日本語の文は主客の融合・統一を重ねるに含んでおり、体験的に言葉を深めるには好都合である。第三に、文としての統一・総括をもたらすのは主体的なものの直接的表現としての「辞」であるから、主語が表現される必要がない。したがって第四に、文は主体のおかれた「場面」（場所ではない）と密接に結び付き、文の理解は「場面」の理解にかかっている。

われわれ日本人がこのような日本語の特質の支配下に思惟し思索すれば、その結果はどういうことになるか。まず、論理的な対応や統一よりも感情的照応・観念的統一が優先し、そのため言語表現の自律的次元を開くことが難しく、また客体化し概念化することによって観念の世界を構想し構築することを不得手とすることになる。中江兆民の「我日本古より今に至る迄哲学無し」の嘆きもここに胚胎し、筆者の指摘する「普遍的な理の意識が成熟しない」ということもこのことと深く関わっているはずである。さらに人間関係や社会、歴史に対する場合には、それらを客観化して内部構造や法則に向かうよりは、主観性が優先し主体的主情的に接近し理解しようとするので、それが有効であるために心情の無私性や純粹性の追求・確保に向かうことになる。動機の純粹さを問うにしても、主体的な欲求、感情、意志、知性などを客体化して分析し、理論的に純化徹底して、客観的に普遍妥当の原理や法則を追求する姿勢は生じにくいことになる。

次に、日本人の思考は、日本語の特質に導かれて、主客を分離して客観の世界に向かうよりは、主客の融合した世界である「場面」において働こうとする。この「場面」は、社会的歴史的側面についてみれば、現に「今」自己が「参贊、参入」している「習俗」によってなっていると見えよう。心情を純化することによって、その心情に映しだされてくるのはこの習俗であらうし、理にふれうるのは「習俗」への随順においてのみであるということになる。しかも無私・純粹な心情に映しだされて

くるということは、我が作為を断つという仕方に応じて「おのずから」ということになる。そして、「おのずから」の彼方にいます超越的な究極者としての神は「なにごとのおわしますかはしらねども」という定かならぬ神となるのは当然であり、八百万の神や諸仏そしてイエス・キリスト、ヤーヴェなどを通してのみ「おのずから」に即するほかはなくなってしまう。

詳しくみればさらに重要な指摘が可能かもしれないが、上述のように日本語の特質はわれわれの考え方や生き方を制約し、それらの日本的な特質の形成の一つの有力な要因となつて働いている。このことからすれば、本書の指摘する課題に対処するには日本語に対する認識と思想形成のための自覚的な使用ということ、それを可能にし有効にするために英語などの外国語を習得し習熟することが重要な前提条件となりそうである。

本書は「日本人の心」の驥の豊かさ、奥行きの深さを明らかにして、われわれのうちにある可能性を追うことを主題としている。書評とはいいながら、この主題の周辺を廻つて、私の関心からする勝手な物言いに終わってしまったようである。〔東京大学出版会一九八四年 二五四頁（UP選書²³³）〕

（わたなべ たけし・専任・日本思想史）

相良 亨（さがら・とおる 一九二一—）主要著作

『近世日本における儒教運動の系譜』弘文堂一九五五年（理想社一九六五年）

『日本人の伝統的倫理観』理想社一九六四年

『近世の儒教思想』塙書房一九六六年

『武士道』塙書房一九六八年

『本居宣長』東京大学出版会一九七八年

『誠実と日本人』ベリかん社一九八〇年

『日本人の死生観』ベリかん社一九八四年

『武士の思想』ベリかん社一九八四年

『講座 日本思想』全五卷（共編）東京大学出版会一九八三—八四年